FSGT80周年記念アッシーズ
（全国・国際討論集会）

フランスで討論会

スポーツ団体の在り方を問う

フランス
勤労者スポーツ・
体操連盟

1394年創立。会員数は約27万人。基本理念は「勝つことだけでなく、みんなのためのスポーツ」。スポーツ連盟とは1970年代から結びつきがあり、交流協定を結んでいる。

スポーツ連盟が代表団を派遣

文＝関戸弘充（代表団・記録担当）

フランスのスポーツ団体・FSGT80周年記念アッシーズ（全国・国際討論集会）［5月14～17日の4日間開催］に、新日本スポーツ連盟は代表団4名を派遣しました。

日本代表団（←写真右から）
伊賀野明さん（全国連盟副会長）
青沼裕之さん（新日本スポーツ連盟附属スポーツ科学研究所・代表団副団長）
関戸弘充さん（大阪府連盟）
小林章子さん（国際活動局・代表団団長）
小林真梨子さん（通訳）

↑会場

地中海に面する港湾都市マルセイユ

各グループに分かれての分科会

マルセイユで開催されたこの集会には、約20か国（フランス、アルジェリア、ベルギー、ブルガリア、デンマーク、スペイン、ギリシャ、イスラエル、イタリア、日本、メキシコ、パレスチナ、サウジアラビア、スロバキア、韓国、チュニジアなど）から400人ほどの参加があり、アジアからは日本と韓国が参加しました。

※カメルーンも参加予定でしたが、ビザの関係で急遽、入国できなかったらしいです。この集会でも国際交流の重要性は認識しているものの、「ビザは、非常に国際交流の壁になっている」と討論されていました。

アッシーズとは、「幸せな日々」を目指して、スポーツ団体はどのように貢献することができるのか、どのような内容で、どの方法で活動をしていくのか、どんな戦略で国内・海外と協力していけばいいのかを4つの全体会議、10のシンポジウム、25のワークショップなどで発表し、そして議論し、これからのスポーツ活動や市民教育運動などを一緒に学んでいきましょうという集会です。この集会のスローガン「市民スポーツ、その歴史に

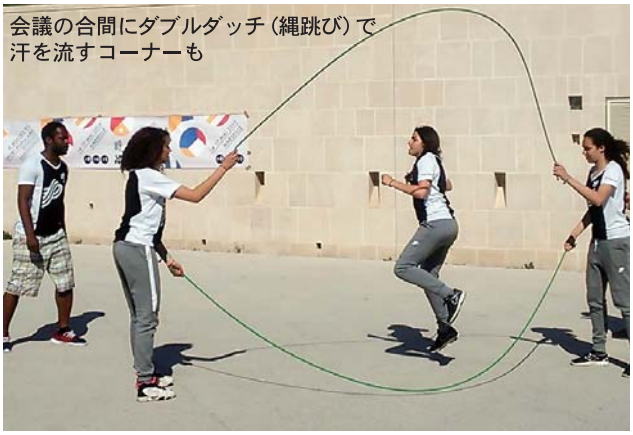
「地方スポーツ行政」の分散会で
施設問題について話し合った

アッシーズ全体会

パーティーでのゆかいな演奏

フランス・スタン市の人たちと
今年8月の広島～長崎反核・平和マラソンに参加の予定

ノルマンディー市の女性の助役のナタリ・フランソワさんと
握手をする小林さん

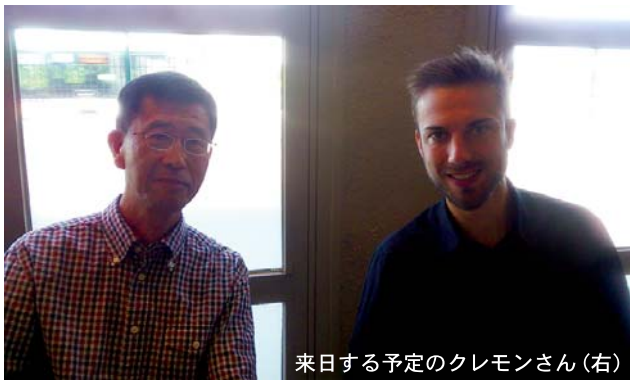

会議の合間にダブルダッチ（縄跳び）で
汗を流すコーナーも

誇りを持ち、今の時代を理解し、未来を制覇する」にもあるように、FSGTの80年間の歴史を感じさせる会場の雰囲気、また課題に積極的に取り組む各国の代表団を見て、日本代表団の4名もたいへん刺激を受けました。

日本代表団からはワークショップにて、スポーツ科学研究所の青沼さんが「2020年東京オリンピック・パラリンピック」について発言しました。そこで各国からの質問で2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催後、会場施設など市民のスポーツ団体はどのように有効活用していくのか、施設にかかる莫大な経費はどう思うのかなどかなり活発な議論が飛び交っていました。

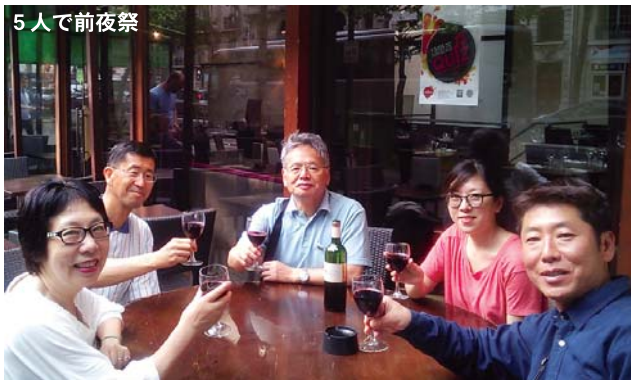
また、私は「反核平和マラソン」について発言し、唯一の被爆国である日本が今年で広島・長崎の被爆から70年目の夏を迎え、尊い犠牲を忘れず、惨禍を繰り返さないために、核兵器の廃絶・被爆者援護をアピールしながら「ランニング活動」を通じて「反核平和マラソン」を実施していることを訴えました。各国からこの活動が賞賛され、今こそ平和を願い、そしてスポーツ

リヨン駅の前で韓国の代表団（体育市民連帯）と一緒に


来日する予定のクレモンさん（右）

「幸せな日々」を目指して

スポーツの発展を願うメンバーと国際交流


5人で前夜祭

精力的に情報交換する青沼さん

FSGT
セーヌサンドニ県事務所で

韓国代表団と乾杯

を通じて訴えていかなければならないとあらためて日本代表団は誓い合いました。今年の広島～長崎間の反核平和マラソンには、フランスから約30名が参加し、一緒に核兵器廃絶を訴え走ってくれる予定になっています。

団長を務めた国際活動局の小林さんはシンポジウムにて、身近で活動している東京卓球協議会の競技革新についての発言をしました。参加人数を増やしていくための工夫などをレポートし、今回通訳をして頂いた真梨子さん（小林さんの娘さん）とも息がピッタリで、発言後は拍手喝采でした。

この4日間を通じて感じたことは、国際交流をするうえで最も重要なことは、まず相手の国に行って、それぞれの国々の現状を把握し、それを肌で感じ、そして人間関係（コミュニケーション）が必要だということでした。集会の中でも随時、国際交流についての重要性が語られていました。各国の代表団の方々の意見を聞き、そして議論し、ともにスポーツ活動の発展を願うメンバーとの出会いを与えてくださった今回の集会に感謝します。（☞20頁に関連記事）

FSGT国際部長のマリオンさんと

FRANCE REPORT ❶

フランスでは政治抜きにしてスポーツは語れない

文＝小林章子（国際活動局）

FSGT地域組織からの参加者301人を含め、専門家、マスコミ、政治家など総勢400人の規模で行われたFSGTアッシーズ（全国・国際討論集会）。6回目となる今回のメインテーマは、「幸福な日々をおくるのにスポーツは何ができるのか？」。とても哲学的な課題でした。

講師は専門家 熱い議論

大きなテーマは「政治・経済・変革」で、それにあわせて分科会がありました。今までのアッシーズと形式が変わっているようですが、希望したすべての会議に参加しました。さらに青沼さん、関戸さん、私がそれぞれのテーマで発表し、参加者と議論できたのはよかったと思います。びっくりしたのは講師がそれぞれ専門家で、熱い議論がされていることです。

特に日本では政治的な発言は少ないのですが、フランスでは政治抜きにスポーツは語れない雰囲気でした。青沼さんが報告した「2020オリンピック・パラリンピックを考える都民の会」の活動には質問がたくさんありました。

もう一つ印象的だったのはFSGTの若返りです。国際部長のマリオンさんは30代のチャーミングな女性で、セーヌサンドニ委員会の代表は30歳のイケメンでした（2015年広島～長崎反核・平和マラソンを走ります）。「スポーツ連盟も若返りを」と強く思いました。

スポーツをお金持ちのモノから労働者のモノに

「FSGTの存在そのものが変革であり、スポーツをお金持ちのものから労働者のものにした」という言葉は印象に残りました。日本でもスポーツ連盟の存在価値を問われていますね？

昨年卓球交流団で来日したジルベールさんが奥さんと参加していました。ジルベールさんが参加したメンバーに私の写真を送ってくれたところ、マルセイユ近郊にいるサラさんが会いに来てくれました。「日本訪問は忘れられない」と話していました。来年は「日本からフランスに行く交流も楽しみにしている」と言われました。

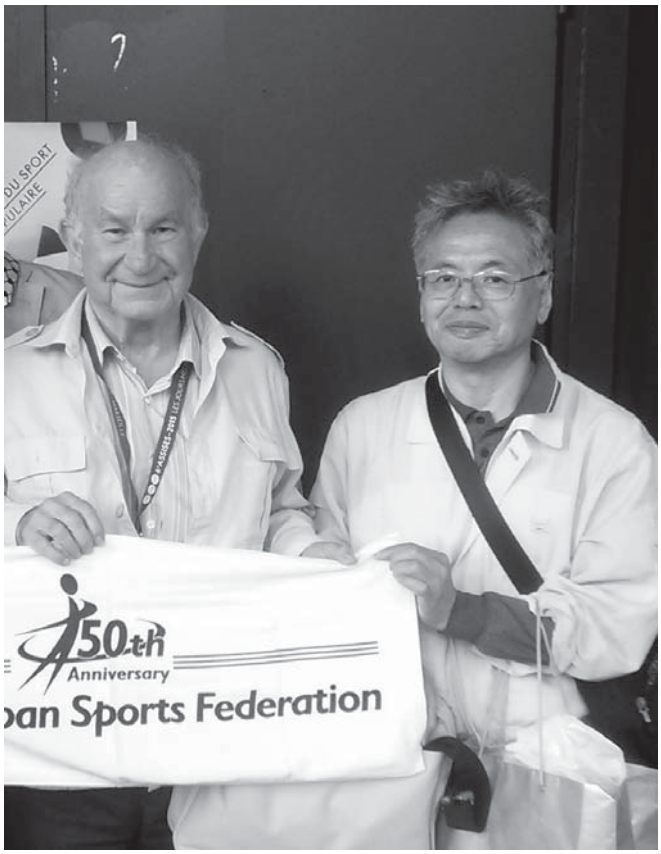
私たちは日々の大会運営に追われていますが、政治・経済・改革に真摯に取り組んでいくことを教わりました。心残りだったのは、マルセイユまで行ってブイアベースを食べなかったことです。

今回、韓国と日本の代表団を担当したボランティアのチエリさん（数学の先生）

FRANCE REPORT ❷

知力、人力、財力に支えられた国際討論集会

文＝伊賀野明（全国連盟副会長）



FSGT元会長のルネ・ムスタールさんと（1990年の新日本スポーツ連盟第18回総会時に来日経験あり）

今回の第６回アッシーズは「全国・国際討論集会」と称するにふさわしい会でした。この集会の要項にある挨拶から、その内容と仕組みを紹介します。

幸せな日々を目指すには

まず、主催者（ＦＳＧＴ）は、問題意識として「スポーツについて新しい考え方を見出してほしい」と呼びかけました。

「フランス、ヨーロッパ、そして世界の政治、社会、経済の状況には危惧を覚えるが、一方で、スポーツには今まで以上に巨大な額のお金が使われている」と指摘します。この問題を打開するために、キーワードとして挙げられていたのが「幸せな日々を目指す」という言葉でした。

「社会には、幸せな日々を目指して行動する時間や、人が解放される場所が必要である。そのためにスポーツ団体は、どのような活動をすればいいのか。どういう協力をしていけばいいか」、その解決の方向を、フランス各地から集まったＦＳＧＴ関係者４００人と50人近くの外国代表で共に探ろうとするものでした。

解決策を見出すためさまざまなプログラム

ＦＳＧＴは、その方向を見出すために、大・中・小の３種類の会議だけでなく、映画、身体活動・演劇フォーラム、ディスコ風のパフォーマンスなども組みいれ、参加者が共に見出そうとしていました。

大きな会議では、研究者から４つの講義が行われました。中くらいの会議では、10のテーマに分かれて討論。そのなかに、外国代表が一緒に集まる会議として「スポーツ・平和・国際」というテーマがあり、そこでスポーツを通じての国際連帯を学びました。小さな会議は、25の分科会（15人くらいの規模）で、３日間同じメンバーで連続的に議論をしていました。

こうした会議に参加することを通じて、市民教育運動やスポーツ団体は、「人の成長のために、そしてどのように一緒に生き続けていくのかを学ぼう」という試みでした。大変な知力、人力、財力をかけて、このアッシーズが開催されていると感じました。

健常者と障害者が共に演じたダンス（FSGTのクラブ）

FRANCE REPORT ❸

マルセイユでの出会いが研究所活動のヒントに

文＝青沼裕之（新日本スポーツ連盟附属スポーツ科学研究所事務局長）

新日本スポーツ連盟附属スポーツ科学研究所事務局長として参加した私は、アトリエでの報告、FSGT関係者をはじめ多くの方との情報交換を精力的に行いました。日本を発つ前に思っていた以上の収穫があり、今後のスポーツ科学研究所の活動に多大なヒントをもらいました。

ここでは、私が出会った中で重要な二人のフランス人との交流について記したいと思います。

『FSGT80年史』は偶然の産物

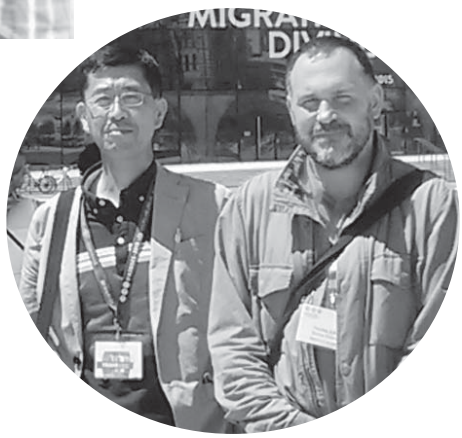
一人目は、フランス社会運動史の研究者、ニコラ・キスさん。彼が著した『FSGT80年史』は、今回のアッシーズに花を添えていました。会場には『FSGT80年史』に掲載された戦前・戦中・戦後の写真が解説を交えてパネル展示され、さらに2ヶ所の壁一面を使って映像が映し出されていたのです。

ニコラ・キスさんと会えたのは、伊藤高弘さん（新日本スポーツ連盟顧問）から情報を得て事前にメールを送ってあったこと、さらに現地でFSGT国際局長のマリオン・シャーズマルタンさんから連絡してもらったお陰でした。15日に昼食をともにしながら、小林真梨子さんの通訳で話をすることができました。

まず、この著書は偶然の産物で、FSGT機関誌「スポーツと野外」に連載していたものを、エルベ・ブレゾさん（機関誌編集長）の薦めで本にしたものだと言います。

また、『80年史』に必要な資料がそろったのは、フランスでは博物館や図書館が充実していて、豊富に所蔵されている労働運動関係の資料を使うことができたから、とのこと。ニコラ・キスさんの話では、さまざまな研究者がFSGTに協力しているようです。私は、『新日本スポーツ連盟50年史』が出版された暁には謹呈すると約束しました。

パレスチナ代表団と



ニコラ・キスさんと

パリ市の五輪招致計画反対意見も

二人目は、パリのスポーツ行政に携わる公務員で共産党・左翼戦線グループ議長のニコラ・ボネ・ウラルジさん。彼はFSGT役員のエマニュエルさんの夫です。

パリ市でもオリンピック・パラリンピック招致計画が進んでいますが、彼は「さまざまな角度からの検討の結果、パリ市への大会招致に反対することにした」と言います。

日本での「2020年オリンピック・パラリンピックを考える都民の会」と共通する活動があるので、いずれ詳しい報告を寄せてもらおうと、彼にその旨を打診しました。